

聖書

原文校訂による口語訳

創世記

法兰シスコ会  
聖書研究所訳注



サンパウロ



INTERNUNTIATURA APOSTOLICA

TOKYO

Noti sunt laudabiles conatus uberesque fructus zeli eorum  
qui in Japonia praeteritis annis Sacrae Scripturae vulgandae  
alacrem operam dederunt.

Nunquam tamen omnium Divinorum Librorum translatio,  
criticae artis notis ditata et consona progredientibus eruditis  
studiis, extremis his decenniis peractis, confecta est. Quam  
lacunam clerus, religiosi, religiosae necnon fideles, singilla-  
tim in exculta Japonia, percipiebant. Quapropter, nonnullos  
abhinc annos, Exc.mis Dominis Ordinariis faventibus, a Soda-  
libus Ordinis S. Francisci petivimus ut munus susciperent et  
ducerent, eadem ratione qua in Sinarum favorem consimile  
opus perfecerunt.

Rev.mi enim Praesules Santos Libros conversos in japo-  
nicum sermonem, nobilem sed simplicem, clarum tamen et  
fidelem nativo Bibliorum codici, cupiebant.

Translationis opus hoc, ex hebraico vel graeco, tempus  
exigit; vigentia atque usitati sermonis vicissitudines difficulta-  
tem quoque afferebant. Genesis conversa diuturnitatem longio-  
rem sumpsit et probabiliter alii sequentes libri celerius eden-  
tur, grammaticis elementis statutis.

Una cum veneranda Japoniae Hierarchia, translationem  
istam, cui Apostolica Sedes opem tulit, commendamus, dum  
de egregia opera gratulamur et gratias Consilio de Re Biblica  
rependimus.

Tokieni, die XXII mensis octobris a.D. 1958.

+ M. de Furstenberg

M. de Furstenberg  
Archiepiscopus Paltenus  
Internuntius Apostolicus

今まで日本において聖書の普及に専念された人々の称賛すべき努力、ならびにその熱意による多大の成果は、よく知られている。

しかしながら、原文に対する批判的注解を豊富に付し、かつ過去数十年の専門的研究の成果をとり入れた聖書の全訳は、まだ成しとげられていない。このようなあってかかるべき聖書が、文化の進んだ日本においてまだないということは、聖職者、修道士、修道女、一般信者の各階層の遺憾に思うところであつた。そこで、わたしは、数年前、全国教区長会の賛同を得て、中国のために同様な訳業を完成したフランススコ会が、日本においてこのよき訳業をひきうけ、これと同じ要領で成しとげるよう、同会に要請した。

全国教区長会の要望は、訳文が高尚でしかも平易、また明解であると同時に原文に忠実であるということであった。

ヘブライ語またはギリシャ語からのこの訳業は、時日を要するものであり、またその上、日常使われている生きたことばの変遷のために、困難が増し加わっている。本書「創世記」が訳了されるまでには、諸方針を決定するため、かなりの期日が費されたが、続刊の書からはすみやかに発行されることであろう。

わたしは全国教区長会とともに、聖座からの援助を賜わった本書を推薦すると同時に、この遠大な事業にたずさわっている聖書研究所の所員に祝辞と感謝を表するものである。

一九五八年十月二十二日

東京にて

教皇庁公使  
パルテ大司教  
+ M・デ・フルステンベルグ

### はしがき

教皇ピオ十二世は、一九四三年九月三十日に発布された聖書研究の奨励に関する回勅 *Divino afflante spiritu* のなかで、「信者のために、また神のことばがよりよく理解されるために、直接原文からの「聖書翻訳を勧めておられます。同教皇がこの少し前の箇所で言われたように、「神感をうけた著者自身によつてしるされた原文は、他のいかなる訳本よりも——それが非常によく訳されていても、また古代語訳であるうと近代語訳であると——多くの権威と重要性をもつものであります」。また教皇は、「神感によって著者の筆から流れ出たさざな表現をも、最大の注意と敬意をはらってとらえ、著者の意味するところをさらに深く、よりじゅうぶんに理解するようにつとめることは、聖書学者の義務である」とも述べておられます。

この回勅の精神にしたがい、駐日教皇庁公使マキシミリアン・デ・フルステンベルグ大司教は、フランススコ会極東総長代理に対し、聖書研究所を設立し、近代における聖書研究の専門的方法ならびにその成果をじゅうぶんに取りいれ、聖書を原語（ヘブライ語、アラム語、ギリシャ語）から、あるいは原文の失われているものに対しては残存する最も古い訳本から、直接に翻訳するように懇請されました。このことは、一九五五年の全国教区長会議において心からの賛同を得ました。

本訳は、批判的研究により原典にまさかのほろうとするものであり、また同時に、教皇庁公使の指

示にしたがい、「すべての人に理解されるように、飾らず、明解な表現と気品ある文体」(一九五六年五月十二日の当研究所の祝別式における教皇庁公使のことば)を用いたものであります。したがつて、口語体をとり、原則として「当用漢字」と「現代かなづかい」によって書き表わしました。

本書は当研究所が訳出しようとする旧新両約聖書の第一の書であります。最終の書の刊行後は、全体を通じて改訂統一し、解説と注を縮小して、手ごろな一冊物の聖書を出すつもりであります。

言語の慣用法などについて、口頭あるいは書面をもってご教示くださったかたがたに対して、ここに深く感謝の意を表し、また聖書翻訳の道を開かれた諸先輩に対しても、心から敬意を表するものであります。さらにまた、本書の翻訳と出版のために、物心両面においてご援助くださったかたがた、特に本書の後援者および信仰弘布会本部に対して、心から深く謝意を表するし下さいであります。

本訳が神のことばの価値をそこなうことのないように、所員一同は最善の努力を惜しまなかつたつもりであります、本書に不備な点がないとは申せません。読者各位に神のことばとしての本書を受け入れてくださるようにお願いすると同時に、翻訳上の欠陥についてはご寛容を請うものであります。

一九五八年 聖マリアのご奉獻の祝日

東京

フランシスコ会聖書研究所

## 目 次

旧新両約聖書の書名および略名	
凡例	
モイゼ五書解説	
創世記解説	
創世記(本文と注)	
付録	
原文批判	294
宇宙についての聖書的概念	292
系図	289
とびらのマーク	282
目次	29
次	14
	1
	VII
	VI

# 旧・新両約聖書の書名および略名

## 旧 約 聖 書

歴 史 書	
創世記	創
出エジプト記	出
レビ記	レビ
民数記	民
申命記	申
ヨシュア記	ヨシュア
士師記	士
ルツ記	ルツ
サムエル記上	サムエル上
サムエル記下	サムエル下
列王記上	列上
列王記下	列下
歴代史上	歴上
歴代史下	歴下
エズラ記	エズラ
ネヘミヤ記	ネヘミヤ

---

教 訓 書	
ヨブ記	ヨブ
詩編	詩
格言の書	格
コヘレト(伝道の書)	コヘレト
雅歌	雅
知恵の書	知
シラ書(集会の書)	シラ

---

預 言 書	
イザヤ書	イザヤ
エレミヤ書	エレミヤ
ナホム書	ナホム
ハバクク書	ハバクク
ゼファニヤ書	ゼファニヤ
ハガイ書	ハガイ
マラキ書	マラキ

---

哀 歌	
バルク書	バルク
エレミヤの手紙	エレミヤ・手
エゼキエル書	エゼキエル
ダニエル書	ダニエル
ホセア書	ホセア
ヨエル書	ヨエル
アモス書	アモス
オバデヤ書	オバデヤ
ヨナ書	ヨナ
ミカ書	ミカ
ナホム書	ナホム
ハバクク書	ハバクク
ゼファニヤ書	ゼファニヤ
マラキ書	マラキ

## 新 約 聖 書

歴 史 書	
マタイによる福音書	マタイ
マルコによる福音書	マルコ
ルカによる福音書	ルカ
ヨハネによる福音書	ヨハネ
使徒行録	使

---

書 簡	
ローマ人への手紙	ローマ
コリント人への第一の手紙	一コリント
コリント人への第二の手紙	二コリント
ガラテヤ人への手紙	ガラテヤ
エフェソ人への手紙	エフェソ
フィリピ人への手紙	フィリピ
コロサイ人への手紙	コロサイ
テサロニケ人への第一の手紙	一テサロニケ

---

預 言 書	
テサロニケ人への第二の手紙	二テサロニケ
テモテへの第一の手紙	一テモテ
テモテへの第二の手紙	二テモテ
テトスへの手紙	テトス
フィレモンへの手紙	フィレモン
ヘブライ人への手紙	ヘブライ
ヤコブの手紙	ヤコブ
ペトロの第一の手紙	一ペトロ
ペトロの第二の手紙	二ペトロ
ヨハネの第一の手紙	一ヨハネ
ヨハネの第二の手紙	二ヨハネ
ヨハネの第三の手紙	三ヨハネ
ユダの手紙	ユダ

## 凡例

- ( ) 印の中の語句は著者あるいは後の編者によって説明としてつけ加えられたと思われるもの。
- [ ] 印の中の語句は他の人による傍注と思われるもの。
- 〔 〕 印の中の数字は、 Vulgaris 訳聖書の章節の番号。
- 印は上欄番号の節のはじまりを示す。ただし行の冒頭の場合には印を付さない。

## モイゼ五書解説

聖書は他のいかなる本とも趣を異にする。すなわち聖書は「聖靈の神感によつてしるされたもので、神をその著者とする。そして神を著者とする神感の書として公教会に託されている」(ヴァチカン公会議)。この理由から、聖書は人に「真理」を教え、人に永遠の「生命」にいたる「道」を示し、かつ人をそこへ導くという点において、他の本の追随を許さない。

さて、キリストは、「わたしは道であり、真理であり、生命である」(ヨハネ14:6)と言われている。したがつて、聖書の第一目的は、当然、人をキリストへ導くことである。それゆえに、聖ヒエロニムスは、「聖書を知らないことは、キリストを知らないことである」と言つてゐる。

聖書がキリストと密接な関係にあるもう一つの例をあげよう。すなわち聖書は、神感によつて人間のことばで表わされた神の「ことば」であり、キリストは、肉となつてわれわれのうちに住んでおられる「みことば」(ヨハネ1:14)である。「神の実体としてのみことばが、罪以外のすべての点で人となられたように」(ヘブライ4:15参照)、神のことばは、誤りを除くすべての点で人のことばとなつたのである」(ピオ十二世)。

聖書には、神がご自身の民をどのように扱つたかをしるした記録がある。このことはその民のことばと考えで表わされている。神が彼らの不完全なことばと考え方を用いた理由は、彼らにこの記録をよりよ

く理解させ、かつ徐々にではあるが、着実にキリストへ、そしてキリストを通じてご自身へ、彼らを導くためである。神はご自身の考えをその民に理解させるために、彼らのことばや考え方だけでなく、彼らが使うさまざまな文体や筆法、ならびに構成法も用いている。金口の聖ヨヘネはこのことを、「神のへりくだり」と言っている。これらの特殊問題については、創世記解説で詳述し、ここでは一般問題を述べるにとどめる。

**モイゼ五書は** 聖書は歴史書、教訓書、預言書の三つに大別される。この三大別は旧新約聖書にあてはまる。旧約聖書のはじめの五書であるモイゼ五書は、歴史書に属し、

### 創世記　旧約聖書の基

その基をなしている。

福音書がキリストの教えを含んでいるように、モイゼ五書はモイゼの教えを含んだもの、ということができる。モイゼの全事業は、選民をまとめ、彼のあとに来る彼のような大預言者キリスト（申18<sup>15</sup>、使3<sup>22</sup>7<sup>37</sup>参照）への道を示すことであった。キリストは、「モイゼはわたしについて書いたのである」（ヨヘネ5<sup>46</sup>—47）と言われている。

しかしながら、福音書もモイゼ五書も、全部が歴史とはいえない。福音書の大部分はキリストの教えから成り、よく説教や教諭の形でしるされている。これらは、使徒とともに過ごされたキリストの生涯の骨組となっている。同様に、モイゼ五書の大部分はモイゼの律法から成り、よく説教や教諭の形でしるされている。これらは、選民とともに過ごしたモイゼの生涯の骨組となっている。

モイゼ五書の第一書、創世記はほとんど大部分が歴史である。第二書の出エジプト記と第四書の民数記とは、それぞれ歴史と律法から成っている。第三書、レビ記はほとんど大部分が律法で、第五書、申

命記の大部分は、内容が律法、形式は遺言である。

五書の中では律法が優位を占めているので、五書全体はイスラエル人、キリスト、使徒たちによって「律法書」と呼ばれ、「預言書」や「その他の書」と区別されている（シラ書の序、マテオ5<sup>17</sup>11<sup>13</sup>、使13<sup>15</sup>参照）。

「律法」がイスラエルの立法者モイゼから出たものであることは、はじめからモイゼ五書と　イスラエル人の信するところである（ヨヘネ1<sup>45</sup>およびルカ24<sup>44</sup>のキリストのことば参照）。しかしながら、おきてにモイゼの名がはじまっているとはいえ、それらのあるものは、モイゼ以後に定められたものであることは、はつきりしている。

レビ記のほとんど各章の書き出し文句「ヤーウェはモイゼに仰せられた」は、単に「神によって認可されたおきてを、イスラエルの立法者の精神に従い、次のとおり定める」を意味するものである。すなわち「このおきては神によるものである」というイスラエル的な言い回しである。

五書のある箇所は、モイゼの手によって書きしるされたことになっている（出17<sup>14</sup>24<sup>47</sup>34<sup>27</sup>、申31<sup>9</sup>24<sup>1</sup>26参照）。またモイゼは、律法を簡明に系統立てて述べ、選民を神に結びつけておく手腕に、驚くほどひいでていた。これは、彼がファラオの宮廷で得た「エジプト人の知恵」（使7<sup>21</sup>—22）と、神から直接受けた教え（出24<sup>3</sup>34<sup>27</sup>—28<sup>32</sup>—34参照）によるものである。とはいって、社会状態の変化のはげしかったモイゼ以後の数世紀を通じて、生きている人間のための社会上、宗教上の律法に、全然変更もしくはつけ加えがなかたということは、考えられない。モイゼの教えは、大部分が読み書きのできなかつた荒野の遊牧民の間で、口から口へと伝えられたものと思われる。また約束の地を征服するまでの安定しなかった約二百年の間も、同じく口で伝えられたものと思われる。

福音が、最初、口で伝えられ、約二十年後に書きしるされたことは、以上のことによくらか類似したものである。これはアラム語でしるされた聖マテオの福音書のことであるが、原書は失われ、後にギリシャ語に訳されたものが現存しているだけである。原語でしるされた現存するいちばん古いものは、聖マルコの福音書である。これは、五旬祭の日に福音をはじめて説教してから約三十年後に、ローマにおいてギリシャ語でしるされたものである。

前述の考察に照らして、今日、割合一般に認められている五書の構成に関する五書の構成に関する諸説

古い記事（あるいは語句の固定した口伝）は、最初の五旬祭の日にシナイ山上で律法が発布されてから三百年以上たって、構成されたものとしている。神を表わすのに「ヤーウェ」という固有名詞を用いてるので、ヤーウェ伝承（J伝）として知られているこの記事は、紀元前九世紀ごろ、すなわち王国の分裂後、南のユダ国においてしるされた（あるいは語句が固定した）ものと思われる。このヤーウェ伝承は、ユダ族に照明をあてたものである。

第二に古い記事（あるいは語句の固定した口伝）は、紀元前八世紀ごろ、北のイスラエル国において構成されたものと思われる。これは、神を表わすのに「エロヒム」という普通名詞を用いてるので、エロヒム伝承（E伝）として知られている。結局、ユダ国における言伝えがヤーウェ伝承となり、イスラエル国における言伝えがエロヒム伝承となつたのである。両伝承とも、多少の律法を含んではあるが、大部分が歴史である点で似かよっている。

モイゼから伝わった社会上、宗教上の律法の主要部分も同様に、イスラエル国とユダ国において、それぞれの歴史を骨組として、別々の固定した伝承となつていったものと思われる。すなわち北のイスラエル語名のかしら文字である。）

エル国における律法に関する言伝えが、申命伝承（D伝）と呼ばれる第三伝承となつたのである。この伝承は申命記だけにあらわれる。第四伝承は司祭伝承（P伝）と呼ばれ、南のユダ国（エルサレムに住む司祭たちによって伝えられたものであろう。これも律法から成る。（J、E、D、Pは、それぞれのドウイツ語名のカシラ文字である。）

以上四つの型にはめられたモイゼからの言伝えは、キリストの生涯と教えを含む四福音書と同じように、それぞれ独特の特徴、見解、目的を持つてくる。（このことは創世記にはっきりあらわれるので、創世記解説で述べる。）しかしこれら四つの伝承は、それぞれ別々のものとして保たれず、組み合わされて一つのものにされたという点で、四福音書と異なる。ちょうど四福音書が紀元二世紀に、タチアヌスによって巧みに組み合わされ、ほとんど一言一句も失うことなく、一つにまとめられたようなものである。この「合併福音書」のシリヤ語訳は、近東では一般に受け入れられ、ある教会では一時、典礼に用いられたほどである。このような文章の組立てが受け入れられたことは、それ以前のセム人の間でも、類似した別々の伝承を一つに組み合わせる才能をもつた者がいて、それらが受け入れられた、ということを意味する。しかしながら、これら四伝承は、同時に組み合わされたタチアヌスの合併福音書とは異なり、順次に組合わされていった。最初の組み合せは、七百二十一年のイスラエル國滅亡のあとに行われたものと思われる。すなわち南のエルサレムのヤーウェ伝承に、北のイスラエル國から持ちこまれたエロヒム伝承がびつたりはめられたわけである。

次の組合せは、このヤーウェ・エロヒム合併伝承の終りのほうに、イスラエル國の中命伝承をさしかどもので、ユダ国王ヨシヤ時代の六百二十二年に、エルサレムの神殿に「律法書」が発見されてから後に、行われたものと思われる（列下22参照）。どうしてこの「律法書」が神殿に置かれたかは不明で

あるが、「申命伝承」と密接な関係をもつものであることは、一般に認められている。

エルサレムにおけるユダ国の司祭たちが伝えた律法、すなわち司祭伝承は、エルサレム滅亡後、おそらくバビロン幽囚中に、最後の形をとったものと思われる。そして、本国帰還後、神感をうけた編者によって、本伝承の骨組である歴史が、モイゼ五書の最後の構成にあたっての骨組として、用いられたのである。モイゼ五書のおもな資料である四つの伝承が、三回にわたって順次に組み合わされたわけであるが、この第三回目の編者は、紀元前四百年ごろ宗教改革を断行したエズラである、と見るほうがよからう。多くの教父たちが支持しているユダヤ伝説（聖書外典、エズラ第四書——、タルガタ訳の多くの版では附録となっている——14章参照）は、文筆の素養を必要とするこのような一大事業は、司祭エズラの手に成るものであるとしている（特に同書14章参照）——律法書が焼けてなくなっているので、エズラは、その中にしるされた世の初めからことを、すべて書きしることができるようになると、聖靈を求めて祈っている）。とにかく現在われわれが手にするモイゼ五書は、紀元前四世紀にサマリア人とユダヤ人がはつきり分れてしまう以前に、最後の形をとったものであることは、あきらかである。というのは、それ以後、ユダヤ人とサマリア人は交わらなかつたのに（ヨハネ4章参照）、彼らのモイゼ五書は同じだからである。

モイゼ五書の四伝承に関するこの一般的な説が発展していくうちに、さらに細かな層に再分しようとする多くの試みがなされた。そして、ヤーウェ伝承の中には、ある記事に並行した箇所または追加されたものがあるという説が、最近ある程度認められるようになった。ヤーウェ伝承からほどかれたこのようないい別個の言伝えを俗間伝承（J伝）と呼んでいる。これは基本ヤーウェ伝承（単にJ伝）よりも古く祭儀のことにはあまり触れていない、と見られている。また、別の基準によれば、これと少し異なる形が

見られる。それはエドムから来たものと考えられるので、セイル伝承（S伝）と呼ばれている。これも基本ヤーウェ伝承よりも古く、紀元前十世紀に構成されたものと見られている。

モイゼ五書の出所研究が進むにつれ、五書に続くヨシュア記、あるいは士師記やルト記まで含めて、それぞれ「六書」「七書」「八書」と呼び、まとめて考察すべきだという説が生れた。他方、申命記は他の四書と符合しないと考え、「四書」だけとする説も生れた。しかし、ユダヤ人は「モイゼ五書」を一括して扱っている。これは使徒および教会によって支持されている。

以上は簡単な概括的説明で、モイゼ五書の構成に関する全問題は、もつと複雑である。各伝承の性格やそれぞれの関係については、以上のほかにまだなお多くの説がある。そのうちの一つだけを、ここに紹介しよう。

創世記中のエロヒム伝承は、モイゼが、エジプトからシナイの荒野を横切ってミドヤンにのがれる（出215）。前に、まとめたものであるという説である。本説はまた、このエロヒム伝承と、これに並行するもつと通俗的なヤーウェ伝承（燃えるやぶの中から神の固有名称「ヤーウェ」（出3）がモイゼに知らされてから後の構成）とを組み合わせたのも、モイゼであろうと見ていく。そうだとすれば、少くとも創世記中の基本エロヒム伝承は、ヤーウェ伝承よりも古くなることになる。編者が組み合わせ記事の中で、神の名称「ヤーウェ」と「エロヒム」を並べ用いたのは、イスラエル人に、彼らの先祖の神「エロヒム」と「ヤーウェ」は同一であることを、教えるためであつたと思われる。モイゼ五書がユダヤ民族の叙事詩であるように、創世記の主題——太祖物語、特にカナアンとエジプトにおける英雄的行為、カナアンの地に關する約束——は、モイゼに導かれてエジプトを脱出し、カナアンに向かうイスラエル人の叙事詩である。これらは他民族の叙事詩の場合と同様、口で伝えられ、数世紀後に書きしるされている。

日本語の「われ」を漢字で表記する場合、「群」に送りがな「れ」をつけ加えはじめて書き、て、「群れ」とあるのが、最近の傾向である。したがって、「群」は「群れ」の古しるせられたのはいつかある。それぞれの語じのじて、古ふ形と新しい形の文字が何回ずつ用ひられたか、という相対度数に関する研究は、各種伝承の相互関係に興味ある側光を投じてゐる。もちろん、このような統計は、モイゼ五書のどの部分がさきに書きしるされたか、という相互関係を示すにすぎない。ある場合には、特に律法に関しては、その部分が書きとめられた時と、それが属する伝承の書きとめられた時とは一致しないであらう。他方、歴史の部分に関しては、よく符合するはずである。以上の問題や、またこのような統計上の研究に必ず付隨しておこる諸問題があるとせよ、最近の研究によると、この基準の適用がもたらしたある結果に且を留めぐみよ。 (A. Murtonen, "The Fixation in Writing of Various Parts of the Pentateuch," *Vetus Testamentum* 3 (1953) 46—53) それは、モイゼ五書の原文を、伝承、内容、背景、文章の独立性から見て、四十四に分類したのである。これにもとづいて、モイゼ五書中の最も古じゆのを七つ、古ふ順に列挙すれば、次のとおりである。

- 1、E伝……十戒 (出20<sup>2-17</sup>)
- 2、E伝……ランス・ヨルダンにおけるイスラエル人の歴史を物語る独立文章 (民20<sup>21-23</sup>の部分)
- 3、P伝……民数記15のおきて
- 4、E伝……太祖の歴史 (創12—5) を物語る創世記中の独立文章
- 5、J伝……出エジプト記および民数記10—12の部分中の歴史を物語る独立文章
- 6、E伝……契約のおきて (出20<sup>22-23</sup>)
  
- 7、P伝……民数記28—30のおきて
- これに続く表の中から、前記の4に続く創世記関係のものや、比較的重要なものをおげれば、次のとおりである。
- 12、P伝……太祖の歴史を物語る非独立文章
- 18、J伝……右に同じ
- 19、J伝……太祖の歴史を物語る非独立文章
- 21、E伝……右に同じ
- 29、J伝……世界と人間の起源 (創1—11) を物語る独立文章
- 31、P伝……太祖の歴史を物語る非独立文章
- 33、P伝……世界と人間の起源を物語る独立文章
- この分類によるモイゼ五書中の一番新しく箇所は、
- 44、P伝……洪水以前の太祖の系図 (創5、アダムからノエまで) である。

前述のような諸問題があるとはいえ、この研究からひきだされる結論を見て、まず驚くことは、外見上、律法が歴史よりも、後の歴史が創世記の歴史よりも、太祖物語が世界と人間の起源よりも、一般にエロヒム伝承がヤーウェ伝承よりも、先に書きしるされたようになつてゐることである。しかし、これらのことば、よく考えれば、納得できることはない。

各種伝承はそれぞれ特徴をもち、時を異にして構成され、組合わされ、そして諸説の沿革 また、部分ごとに時を異にして書きしるされたにもかかわらず、モイゼ五書は、非常に巧みに一つにまとめられてゐるや、約二百年前の一七五三年になつては

じめて、フランス王ルイ十五世の侍医 J. アスツルック (J. Astruc) によって、創世記は並行する二つの主要伝承から成る、という説が発表された。彼は西伝承をそれぞれ、エロヒム伝承、ヤーウェ伝承と名づけた。他の学者たちはこの出所研究をモイゼ五書全体に及ぼし、それから五十年後に、エロヒム伝承から司祭伝承を見つけだし、百年後に、ヤーウェ伝承から申命伝承を見つけだした。

十九世紀後半における最も有名な学者は、J. ウエルヘウゼン (J. Wellhausen) であった。このころから、あやまつた哲学原理が創世記の出所研究に適用され、必然的にその根本の前提と同様、あやまつた結論が生れた。すなわち超自然の力とか聖書の神�性の否定を前提とする唯理主義が、この研究に適用され、モイゼ五書の史実性および五書とモイゼとの関係が否定されるようになつた。これらのあやまつた結論に関する質問に答えて、教会は、教皇庁聖書委員会を通じて、その非を通告し、モイゼ五書の史実性、出所、構成に関する研究において、結論を早急に求めないようにと警告した（一九〇五、一九〇六、一九〇九年の回勅）。

ところが、過去半世紀間における考古学上の発見、および、それに関連のある科学の長足の進歩、ならびに、古代近東の歴史に関する言伝えの重要性と確實性の発見にともなつて、研究に適用されたこれらのあやまつた原理、あやまつた結論は、しだいに捨てられるようになつた。したがって、教会が警告してきた危険性もしだいに少なくなつてきたわけである。また他方では、考古学、古生物学が発達し、これらが聖書研究のための新開拓地となつた。このような事情に直面して、教皇ピオ十二世は、一九四三年に聖書研究の奨励に関する回勅を出された。その中で、教皇は、聖書神学をおろそかにすることなく、むしろさらに、これを重視して、古代の文物、風習、制度をよく研究するようにと、特に力説されてゐる。

最近の指示は、一九四八年に聖書委員会の書記からパリの大司教スアーリ機卿 (Card. Suhard) にあてられた書簡の中に見られる。本書簡は、「モイゼ五書の出所と創世記のはじめの一章の史実性」だけについて論じてゐる。まず前記の三つの回答に言及した後、モイゼ五書の出所に関する第二の回答を取り上げ、次のように述べてゐる。「モイゼ五書の構成に関する」、聖書委員会は、一九〇六年六月二十七日の前述の布告の中で、モイゼが『書を著わすにあたり、口伝または文書を資料としたこと』およびモイゼ以後の者がこれに筆を加えたり、書き改めたりしたことは、肯定してもさしつかえない、と言ってゐる。今日、モイゼ五書には出所があるということを疑つたり、また後年の社会上、宗教上の事情によつて、モイゼのおきてが次第にふえたとこうことを疑う者はだれもいなし。この社会上、宗教上の過程は、歴史物語の中にもあらわれてゐる」。

以上の声明と、これとほとんど同時になされた有名な考古学者による発表 (W. F. Albright, *The Archaeology of Palestine* (1949), p. 224) とを、比べてみるとおもしろい。彼のことばは、この複雑きわまる問題に対する今日の結論の大略を、ほとんど言い表わしてゐる。彼は次のようにしるしてゐる。

「概して、モイゼ五書が物語としている時代は、それが最終的に編集された時よりも非常に古く。その史実の確実性や文章の古さは、新しい発見によつて、次々に確証されてゐる。モイゼの言伝えの核心に、後年つけ加えがあつたと仮定する必要がある場合でも、それらのつけ加えは、古代の風習、制度の正常な発達を反映してゐる。また後年の筆記者が、モイゼに関する残存の言伝えを、できるだけ多く保存しようと努力したことをもあらわしてゐる。したがつて、五書の著者は本質上モイゼである、ということを否定するのは、全くの酷評である」。

前述の聖書委員会の書記からスアーリ機卿にあてられた書簡は、ピオ十二世の回勅を次のように引用

## 創世記

して終っている。「(本研究に)必要とされるものは忍耐である。忍耐は、日常生活に必要な賢明と知恵の部分である。教皇は言われた、「むずかしい問題がすべて解決されていないことに、驚くものはだれもない。……しかし解決されていないことが、研究心を失わせる理由とはならない。地の実りを得るには、最初は種をまき、長期間のほねおりを必要とする。人間のする研究も、これと異なるものではないことを記憶しなければならない。……したがって、今日最も複雑で困難に見えるこれらの諸問題は、絶えざる努力によって、最後には全部解決されるであろう、と期待してもさしつかえなかろう」。

しかし、モイゼ五書が、いつ、どこで、どういうふうに構成されたかについて、いかに多くの問題があろうと、また今日までに解決されていない問題がどれだけ残つていようと、われわれは、それ以上に重要な次の事実に確信をもつていて。すなわち、聖書としての五書は神のことばであり、「キリスト・イエズスにおける信仰によって、救靈に至る」(チモテオ後3:15) 知恵をわれわれに与えるものであること、および「神の人は全き者となり、すべての善業にそなえられる」(同書3:17) ということである(ヨリント前10:11参照)。いかなる時代の人にとっても、聖書の価値が変わらないのは、神のことばのゆえである。聖書は、第一に、神が人に「生命」を与えたためになされたことを、神感をうけてしるしたもので、最終的目的は、その生命に至る「道」を教えることである。聖書はまさしく代々にわたつて「真理」である。

モイゼの言伝えが、彼以後の数世紀の間に、多くの人の手により、異なる社会状態のもとで、それぞれ時を異にして、しるされ、あるいは編集され、ついにモイゼ五書ができるがったわけである。以上の多様性にもかかわらず、その中にはばらしい根本的一致が見られるのは、神がその第一著者だからである。旧新両約全書に驚くべき一致が見られるのも、同じ理由からである。

- モイゼ五書のこの一致は、その綜合計画の中によく見られる。五書は、そもそも、イスラエル人が嚴粛な契約によって神に結ばれ、選民となつたことをしるした歴史であるが、この記録は、その史実とともに義務を含んでいるので、同時に「律法」である。この歴史と律法は、次とのおり五段階に分かれている。
- 1 創世記……イスラエル人を諸民族の中から選ぶ
  - 2 出エジプト記……契約によってイスラエル人を聖別する
  - 3 レビ記……特別の律法によってイスラエル人を清める
  - 4 民数記……約束の地への旅
  - 5 申命記……約束の地における国家建設の準備

## 創世記解説

### 創世記

旧約聖書が新約聖書の前置きであるように、創世記は旧約聖書の前置きにあたる。さらに厳密には、律法であるモイゼ五書の前置きである。五書のうち、一貫して歴史を物語るのは、本書だけであり、他の四書に見られるような律法のまとまった部分や、その一部も見られない。しかしながら、本書には、イスラエルの基本的律法、すなわち安息日（22-3）、いけにえ（4<sup>3-4</sup>8<sup>20</sup>）、十分の一献納（14<sup>20</sup>28<sup>22</sup>）、割礼（17<sup>21</sup>）<sup>4</sup>、うじこのあがない（22章）、なかんずく最も基本的な律法である神に対する服従（27）<sup>17</sup>を物語る歴史的出発点、または先例が見られる。

本書のヘブライ名は、本文のはじめのことば「はじめ」という意味の語「ベニーム」である。著者は本書中の歴史の出発点を、この語で示している。その歴史は創造から始まって、エジプトにおけるヤコブとヨゼフの死に及んでいくが、趣を異なる二つの部分、すなわち〔アダムからアブラハムの父テラーまでの太古の歴史（1-11章）〕と、〔太祖アブラハム、イサク、ヤコブおよびその十二人の子の歴史（12-50章）〕とから成っている。このヤコブの子らはイスラエル十二支族の祖となり、一つのイスラエル族としての成立は出エジプト記で始まる。

ヨーロッパ語による本書名は、そのほとんど大部分が、本書のギリシャ名「ゲネシス」から取ったものである。この「ゲネシス」という語は、本書の内容、すなわち事物の起源と選民の根のおこりを示していられる。いちばんよく用いられる訳語は「系図」である。また「トレドス」が「歴史」を意味する場合もある（1、3、10）。十の「トレドス」は次のとおりである。

- 1 天地の創造史（2<sup>4</sup>）
- 2 アダムの系図（5<sup>1</sup>）
- 3 ノエ家の歴史（6<sup>9</sup>）
- 4 ノエの子、セム、ヘム、ヤフェトの系図（10<sup>1</sup>）
- 5 セムの系図（11<sup>10</sup>）
- 6 テラー（アブラハムの父）の系図（11<sup>27</sup>）
- 7 アブラハムの子イスマエルの系図（25<sup>12</sup>）
- 8 ア布拉ハムの子イサクの系図（25<sup>19</sup>）
- 9 エサウすなわちエドムの系図（36<sup>19</sup>）
- 10 ヤコブ家の歴史（37<sup>2</sup>）

この七つの「系図」のうち三つ（4、7、9）は、選民の歴史から取り除かれていく太祖の傍系子孫の系図をえがき、残りの四つ（2、5、6、8）は、アダムからヤコブまでの直系図をえがいている。このヤコブはイスラエルという名に改められ、選民の父となる。「もろもろの民が服従する者」、すなわ

ち約束されたメシアが「来るまで」(49章)、家系が続くところのは、ヤコブの子ユダを通じてである。キリストは新しアダムとなる。そしてキリストにおいて、すべての者、すなわち選民も取り除かれた者らも差別なく、再結合されるであろう。またキリストにおいて、われわれは宇宙の基が定められる以前から、御父によって選ばれたのである。その御父の目的は、じつさうのもの、すなわち天にあるものも地にあるものもひととく、キリストにおいて一つに帰せしめることである(ヒューリック140参照)。本書はそもそもの起源から始まつてゐるが、終局、すなわちキリストくと向かつてゐる。

**区 分** ら始まる。このアブラハムの召出」といふ出来事は、創世記の長いほうの部分、すなわち太祖の歴史(12—50章)のはじまりとなつてゐる。この部分は三つに区分され、これを第一の部分として、二つに分かれる。創世記はだいたい平均した次の四つの部分に分けられる。

- 第一部 世界と人間の起源(1—11章)
- 第二部 太祖アブラハム(11<sup>27</sup>—25<sup>18</sup>)
- 第三部 太祖イサクとヤコブ(25<sup>29</sup>—36<sup>43</sup>)
- 第四部 ヨゼフの伝記(37<sup>1</sup>—50<sup>26</sup>)

第一部(1—11章)は特殊な歴史であるから、あとで特別に考察することとする。創世記と歴史 る。ここでは、第一部は太祖の歴史を物語る第一、二、三、四部の前置をやると、いふべき、じゅうぶんであろう。創世記が一般歴史と関係をもつるのは、アブラハム、イサク、ヤコブのころから始まる。アブラハムの移住は紀元前一八五〇年ころ、すなわちペピロンのへ

ムラビ王が一六九〇年ころ、あの有名な法典を発布する約百五十年前のことだとさうことになつてゐるが、この年代は正確だとは限らない。最近の研究(A. Rasco, "Migratio Abrahae circa annum 1650," *Verbum Domini* 35 (1957) 143—154)から、一千年のころとなりそうである。そうだとすれば、アブラハムはムラビよりすこし後の人物とさうことになる。

しかし、この太祖の歴史もまた、今日のような歴史とは異なり、最初は物語られ、そして口伝として伝えられ、数百年後に書きしるされたものである。太祖の歴史の性格を理解するには、それが、<sup>1</sup>家族史であること、<sup>2</sup>通俗史であること、<sup>3</sup>宗教史であることを、心に留めておく必要がある。

まず第一に、太祖の歴史は代々続いて口で伝えられた家族史である。家族が多くなり、分散していくにつれ、この家族史は非常に多くの別々の言伝えとなつてしまつた。もちろん出所はみな同じであるが、細部は少し異なる。12章と20章と26章の11つの記事は、おそらくこの例となりうる。26章注<sup>4</sup>で、神がサラまたはレベッカの操を、どのようにして守られたかを物語る三つの記事の関係を述べた。各伝承の著者および創世記の著者ならびに編者は、彼らが語つたこと、あるいは書きしるしたものの性質と価値を悟つていた。また彼らから話を聞いたり、あるいは彼らの書を読んだ同時代の人々も、このことを悟つてゐた。われわれもまた、このことを悟る必要がある。ところのは、彼らは神感によつて、われわれのためにも語り、また書きしるしたからである。

第二に、太祖の歴史は通俗史である。通俗史とは、興味あるものを興味ある方法で記録したものである。特に興味のなきことがいは、たとえそれが歴史上きわめて重要なものであつても——われわれはそれを歴史とみなすのだが——見落される。たとえば、著者は自分がした記事の中でも重要な地位に立つとのアラオの名もあけてしない。アラオはだれのことであるかを、同時代の人々は知つてはいたので、

彼らに知らせる必要はなかつたのである。言伝えはこうじうふうに伝えられた。他方、人名、出来事、自然物についての通俗的な説明が一般に興味をもたらした。これらも代々通俗的なものとして受け継がれていた。したがつて、著者はためらうことなく、一つの名についての二つの相異なる説明を並べ、時には、「今日でも……と言われてくる」という一句をつけ加えている（<sup>22</sup><sub>14</sub> および注3参照——名についての通俗的説明の例としては29章注<sup>11</sup><sub>13</sub>—16 30章注<sup>2</sup>—10 参照——自然物については19章注10参照）。これらの通俗的説明は適切に述べられ、また当時の人々もそれだけで満足していた。著者はそのようなことがらについての批判のことは少しも考えず、ただ通俗的説明として記録している。著者が主張するつもりでなかつたことがらを、もしわれわれがせんさくして、これを批判するならば、われわれは著者に対してももちろん、われわれ自身をも傷つけることになる。

第三に、太祖の歴史は宗教史である。著者はわれわれに、ただ歴史のための歴史を物語ることに興味をもつていらない。彼が興味をもつたのは、神がご自分の民のために何をなされたか、また選民はどのようにそれにこたえたか、という記録である。この関係は続いてなされる契約と約束の中にあらわれる。まず、アダムが罪を犯した後、彼に未来における救世が約束される（3<sup>15</sup>）。この契約のしるしとなつたのは女とその子孫で、このことはイザヤがアカズ王に与えた「しるし」を思い出させる（イザヤ7<sup>14</sup>）。マテオ1<sup>23</sup>ならびにガラチア4<sup>4</sup>、黙12章参照。

次にノエとの準備的契約がある。このしるしはにじで、すべて肉からなるものを滅ぼす洪水はもう一度とない（9<sup>8</sup>—17）といふ約束をともなつてゐる。

次にアブラハムとの契約がある。この契約は土台のような性格をもつ。神はこの契約の中でアブラハムを「多くの民族の父」とし、「カナアンの全地を永久の所有として、彼とその子孫に与え、彼らの神と

なる」（17章）と約束されている。このしるしは割礼である。

この契約のときにアブラハムとその子孫に約束されたことは、イサクとヤコブにもくり返されてゐる。創世記の歴史は、ますます唯一の神と一民族についての記録となり、「律法」の「基礎」であり、全旧約聖書の「柱石」であるシナイの契約へと向かっている。この契約のしるしは安息日で、十戒がその規範となつてゐる。新約によつて代られるまで効力があつたのは、この契約である。律法はわれわれをアブラハムの子孫であるキリストへ導く指導者である（ガラチア3<sup>24</sup>）。このアブラハムにおいてすべての民は祝福される（ガラチア3<sup>8</sup><sub>16</sub>）。人を救う洗礼の水をもつキリストの教会は、水の上のノエの箱船に前表されてゐる（ペトロ一書3<sup>20</sup>—21参考）。キリストご自身は、神がアダムに約束されたとおり、へびの頭をふみつける女の子孫である（3<sup>15</sup>）。

さて第一部を特別に考察しよう。五書の前置きである創世記は、すでに書きもある「歴史」についてのとなつてゐた律法の序文としてあとで書きしるされたものであろう。これと同様に、第一部も創世記の前置きとなつてゐるので、おそらく一番最後に書きしる

の契約であり、創世記が基礎を置いている史実は、アブラハムの召出しあよび神とアブラハムの契約である。どちらの史実においても、罪によつて人は堕落していった。しかし神ヤーウェのみは、ご自身が召出し選ぶものを、救うことができる。この型は約束された救世主の来臨までくり返される。

イスラエル人は——キリストのことばを借りて言えば——「アブラハムが存在する以前に」（ヨヘネ8<sup>58</sup>）、どういう事があつたかについて、常に知りたい気持をもち、またこれについてある程度の解答をもつていたにちがいない。このことは、どの民族でも同じことである。しかしながら、他民族の場合と異

## 創世記

なり、第一部に含まれてゐるイスラエル人の解答は、神感によるものであり、したがつて真実である。過去の出来事を誤りなく物語つてゐるので、ほんとうの歴史ではあるが、われわれが普通考へる歴史とは全く趣を異にする特殊のものである。さきに引用したスパー極機卿へあてた聖書委員会の書簡は、「創世記第一部の文体についての問題はモイゼ五書の構成に関する問題よりも非常に複雑でわかりにくく」と述べている。また専門的聖書注釈にあたっては、「古代の近東諸国の人々が用いた文学上のくふう、彼らの心理、表現方法、さらに歴史の真実性に対する彼らの見解にいたるまで、綿密にしらべる」必要があるとも言つてゐる。

他民族における事物の起源についての説明は、多神教を前提としているので、神話として知られている。これらの神話は真実であるはずがない。神は唯一であるからである。しかし第一部は、欺くことも欺かれることがありえない唯一の神のことばであるから、真実である。要するに、神は「アブラハムが存在する以前に」ご自分がなされたことがらを、第一部の中でわれわれに語つておられるのである。神はこの歴史をあらわすにあたり、当時の人々が用いていた文体を採用された。

神は現代のわれわれの考え方で、この記事を直接モイゼ、アブラハム、その他、彼ら以前の者たちに啓示することができたであろう。しかし、この部分を除くモイゼ五書がどのようにして書かれたかを考えてみると、そういうことはありそうもないことである。また、われわれは普通の歴史の場合と同じような考え方で、まず神が最初の人間にそもそもその世の初めのことだけを語り、その人間から第一部が語り伝えられたものだ、と想像しがちである。しかしそれもありそうもないことである。なぜなら、最初の人間から一万余年ないし十万年も経過しているし、また聖書がわれわれに物語つてゐるとおり、メソポタミアにおけるアブラハムの先祖は、唯一の神ではなく多神をまつていていたからである（ヨシュア24章）。

2). 彼らが、創世記にしるされているような一神論的な話を、そのまま変えずに語り伝えるということは、できそうもないことである。それでは、どこから第一部は来たのであらうか。神が著者を通じて述べようと思われたことがらを、どのようにして著者は知ったのであらうか。

創造や洪水の話を例にとり、これとメソポタミア神話とを比べてみると、その背景が非常に類似していることに気がつく。しかし聖書記事のほうには、神々の人間的気まぐれな行為がしるされていないだけでなく、多神論的あとかたもない。第一部が、現代的意味においては、「歴史」として格づけされないことはたしかであるが、神話でもないことは、もつとたしかである。アブラハムは父テラーに連れられてメソポタミアから来た。したがつて、本来の背景がメソポタミアのものであることは、無理もないことである。おそらくメソポタミアにおける数ある物語のうちのあるものも、もちこまれたことである。しかしそういう場合には、ラケルによつてメソポタミアから持ちこまれた父の偶像（31章21-35節）が、シェケムで捨てられたように（35章2-4節）、きっとそれらの物語も捨てられたにちがいない。6章1-4中のある語句は、このような物語から借りたものかもしれない（6章注1参照）。

他民族における事物の起源についての説明の背景と、イスラエルにおけるそれとが類似しているように、おそらく先史時代についての推理法、すなわち宗教的考へに照らして現在の事実から推理する方法も、類似していくことであろう。しかし他民族のとつた方法は、誤つた宗教的考へならびに事実についての誤つた解釈を出発点としたため、必然的に誤つた神話が生れた。これに対し、イスラエルにおける著者たちは神感のもとに、正しい信仰ならびに事実についての正しい解釈を出発点としたため、創造と事物の起源についての真理に到達することができた。この方法は、今日の科学者が恒星、惑星、衛星の構成に関する「歴史」を考え出す時にとつた方法にたとえることができる。しかしながら、科学者の考

え出す「歴史」は、往々にして誤っていることがある。特に人間の進化については、後に誤りであることが判明した。本書中の神のことばに誤りがあるうはずがない。

神感のもとに著者たちが到達したこれらの真理は、また同様に神感によって、古代の他民族が事物の起源を説明する時に用いた文体とあまり異ならない形の中におさめられ、当時の人々が理解しやすいように表現されている。ちょうどカナにおいてキリストのことばによって満たされた水がめの中身が、いつもの中身と全く異なるように（ヨハネ2章）、両者の文体は同じであるが、内容は全く異なる。

カナにおける水がめの中身は良酒に変わったが、入れ物は水がめのままであった。著者は物質世界について誤った考えを多く持っていたが、神は著者のもつてゐる概念をそのまま採用された。著者は、地球が平らなものであり、また天は堅い板で、その上に水をたくわえ、雨は水門から降るものと思っていた（巻末第一図参照）。当時の人々はみなそう思っていたのである。もし著者が、われわれが知っているよう、あるいは想像するように物語れば、当時の人々はだれもそれを信じなかつたであろう。そこで、神は「へりくだり」、ご自分が教えようと望まれた永遠の真理に、当時の衣を着せられた。神の民であつた当時の人々は、こういうふうに真理を理解した。神の民であるわれわれも真理を理解すべきである。しかしながら、第一部には特別な記事が一つある。これに並行する記事は、聖書以外の文献には全然見られない。すなわち2—3章にしるされている「人間の墮落」である。その背景がメソポタミア的であることは事実であるが、男と同格としての女の創造、誘惑と墮落の描写、特に救世の約束は独特のものである。これは、唯一の神を信する者だけがいだく質問に答えたものである。すべてのものが神から来て、しかも神が全善であるならば、惡はどこから来るのであろうか。惡は人間から来るにちがいない。

人間は自由意志をもち、罪によつて自由意志を乱用し、惡を生むことができるからである。またすべてに参考としてあげることにしよう。

の人は原罪の結果としての惡と、罪への傾きとを受け継ぐので（8:21「人の心は若い時から惡に傾いている」参照）、この罪は人類の始祖である最初の人間から来たにちがいない。著者がこの事実を記録するにあたつて選んだ細部の記事の意義については、注の中で論ずる。聖書は神感によるものであるから、その中にしるされた根本的史実は真正のものであることを、われわれは知つている。

創世記第一部の特別考察を終るにあたつて、その中にしるされている比較的重要な根本的史実を簡単に参考としてあげることにしよう。

- 一、唯一全能の神が世界開びやく以前から存在すること
- 一、神は人間を含む万物を創造されたこと
- 一、神によつて造られたすべてのものはよいこと
- 一、人間は地を治め支配することになつてゐること
- 一、女は男のつれとして男と同格に造られてゐること
- 一、すべての人類はこの最初の男と女の子孫であること
- 一、人は罪を犯し、惡を背負つてゐること
- 一、この惡は始祖からすべての人類に及んでゐること
- 一、救世主が来て惡の力を征服するであろうこと

創世記第一部は人類の起源を述べると同時に、人類に対する神の攝理の型を示している。この型は歴史を通じてくり返されるであろう。この型の循環は神から出る本来の善、人間から出る破滅的罪惡、神の全善と慈悲による救いである。すなわち1—3章には創造の本来の善、次に原罪と楽園からの追放と死とがしるされているが、救世の約

束が織りこまれ、これで一つの型が終つてゐる。次の循環は4章のカインとその子孫の罪で始まり、洪水を物語るが、ノエの救いで終つてゐる(6—9章)。11—12章にはペベルの人々の罪と離散、ならびにアブラハムの召出しがしるされている。この型はまだ続く。すなわち「ロトはソドム滅亡」から、ヤコブは兄エサウの怒りから、ヨゼフは兄たちの裏切りとエジプトの獄舎から、それぞれ救われる(これらを主題とした知10章参照)。すべてこれらのこととは、イスラエル人がエジプトにおける奴隸生活から解放されるということの前置きとなつてゐる。そして終局的には、最初の人間アダムが最初に犯した罪のあとで約束をうけたとおり、キリストによる救世へと向かつてゐる。もう一度くり返すが、創世記は、第一著者である神、すなわち歴史のはじめから終りまでを同時にごらんになる神の見地によるものである。

この見地をはつきりあらわし、またこの型を明白に示すために、聖書記者は本書前半において、神がひとりごとを言われたようにしてゐる(1:26—2:18, 3:22, 6:3—7, 8:21—22, 11:6—7, 18:17—21)。記者は後世の人たちが考え出したような神学用語や概念の助けを借りることなく、またそれらを用いて文章に重みをつけるとともに、普通の人々にわかりやすく書きしるしてゐる。そして崇高かつ純真な心で、神の内的思想を、神が神ご自身と会話されてゐるようにあらわしてゐる。自己のみにて足る唯一の神と同等のものはないので、この神聖な会話は莊厳な内省の形でしるされている。この大胆な文体はいつの時代においても常に人の心を動かす力をもつものである。後世の人たちが考え出した神学上の洗練された抽象的な文章では及ばないところである。

**創世記中の各伝承の特徴**

創世記はその綜合計画と構成の点で、驚くべき統一が見られるけれども、モイゼ五書解説で論じたとおり、三つないし四つの伝承を織り合わせたものである。

次に、これらの伝承の特徴を簡単に述べてみよう。

**ヤーウェ伝承**は創世記を支配するものである。その語調は劇的かつ通俗的で、神について物語る場合、擬人法を用い、直接的である。本伝承は事物の起源に興味をもち、第二創造史で始まる(2—3章)。これは第一創造史よりも古い。本伝承による代表的記事は「エジプトにおけるアブラハム」(12:19—20)と「マムレにおける出現」(18章)であろう。

**エロヒム伝承**は、創世記にあらわれてゐるよう、アブラハムの記事から始まる(15章注<sup>1</sup>参照)。本伝承が事物の起源についての物語をもつていたかどうかは知られていない。もしもつていたとすれば、その物語はヤーウェ伝承にゆずつて削られたのである。またヤーウェ伝承と合併される時でも、その組み合わされる部分の細部の記事は、若干削られたものと思われる。その語調は比較的じみで、神を普通の人間の姿ではなく、夢の中に出現させ、あるいは夢の中で語らせ、非常にうやうやしく物語つてゐる。その代表的記事は「アブラハムのゲラル滞在」(20章)である。

**司祭伝承**は、年表、祭儀、おきてに関心をもち、他の伝承よりも非常に発達した神学を背景としている。特に第一創造史(1章)におけるつりあいのとれた学問的記述の中にそれがあらわしてゐる。創世記の中に十の「トレドス」をさしこんで、本書に骨組を与えてくるのは、本伝承である。その代表的記事には、1章のほかに、「割礼と契約」(17章)と「太祖の墓」(23章)がある。

五書の出所について的一般考察のところで述べたように、創世記には三つの主要伝承(申命伝承が創世記に用いられていないことはもちろんである)があるという仮説だけでは、解決できない難問が残るので、最近ヤーウェ伝承をさらに細かに分類し、第四伝承を引き出そうといふ試みがなされた(このようないやーウェ伝承の再分については8章注<sup>4</sup>、9章注<sup>3</sup>、38章注<sup>1</sup>参照)。ヤーウェ伝承から引き出されたこの別個の伝承は、俗間伝承と呼ばれてゐる(別の基準によつてひき出されたものはセイル伝承)。俗

間伝承であるからには、特徴の点で、司祭伝承と正反対の極端に立つものと思われる。また俗間伝承がじちばん古く、司祭伝承がじちばん新しくという点でも、両者は両極端に立っている。このような別個の伝承を支持する学者たちの中で一般に、本伝承によるものだとみなされている記事は、「人類の墮落」(6<sup>1-4</sup>)、「カナアンののろい」(9<sup>20-22</sup>)、「バベルの塔」(11<sup>1-9</sup>)、「ソドムの滅亡」(19章)、「ディナの被害とシェケム襲撃」(34章)、「レウベンの醜行」(35<sup>21-22</sup>)、「ユダとタマル」(38章)である。最後に、語調と特徴について、本伝承によるとされてくる「イサクのゲラル滞在」(26<sup>6-11</sup>)と、ヤーウェ伝承による「エジプトにおけるアブラハム」(12<sup>10-20</sup>)と、エロヒム伝承による「アブラハムのゲラル滞在」(20章)とを比較してみるとおもしろい(26章注4参照)。

前述の三つないし四つの伝承のどれにも属していないとみられている記事がある。しかしながら、どの記事がそうであるかについては、その他すべての問題の場合よりも、学者によって意見がまちまちである。じちばんよく論じられてくる記事は、「四王の遠征」(14章)、「エサウの系図」(36章)の部分、「ヤコブの祝福」(49<sup>2-27</sup>)である。最近この範囲にはくるものだと提唱されているもう一つの記事は「カインとアベル」(4<sup>2-16</sup>)である。

創世記の史実性と出所の徹底的研究から得られる一つの確実な結論はこうである。すなわち最も複雑困難なこれら諸問題の全面的解決の日は——教皇と聖書委員会はそれを期待してもさしつかえなかろうと言われてくる——まだ到来していないということである。

### ヘブライ語原文 と古代語訳本

现存の創世記のヘブライ語原文は、概してよく保存されているが、ところどころそこなわれていて、本訳の基礎として、必要かつ可能な場合、そういう箇所

を原文批判の原理にしたがい、はっきりしたものに修正した。これらの修正の根

拠となった古代写本や古代語訳本は、原文批判の中であれぞの場合について述べる。

注の中で述べる「現存(ヘブライ語)原文」とは、ユダヤ人ラビたちによって公式に伝えられた原文のことだ、「マソラ」(おそらく「伝統」の義)学者によって母音符号がつけられ、アクセント、字数、節数、句読点などが一定されている。マソラ学者とはユダヤ聖書評釈者のことだ、彼らは第七世紀から第九世紀までに、それまであった原文の差異をすべて除き、ラビたちの言伝えに基づいて一定のものにしてしまった。それ以前の原文は子音文字だから成っていた(ある場合に母音の働きをする子音もある)。サマリア人が保存している原文というのは、このような子音だけのもので、注の中では「サマリア五書」として出ている。これはユダヤ人のモイゼ五書の最後の編集よりも少しあとのものである。最近、死海の近くで発見された写本も子音文字だけのものである。創世記の全文は発見されなかつた。次に述べる古代語訳本の基礎となつたのは、このようなヘブライ語の子音だけの写本である。

注の中で述べる「ギリシャ語訳」とは「七十人訳聖書」のことだ、伝説では七十二人の学者がアレキサンドリアにおいて七十二日間に翻訳したものとなつていて、モイゼ五書のこのギリシャ語訳は、おそらく紀元前第三世紀になされたものである。紀元第二世紀にギリシャ語に訳されたものには、アキラ訳、シンマクス訳、テオドチオン訳がある。

注の中で述べる「ラテン語訳」とは「タルガタ(通俗)訳聖書」のことだ、聖ヒエロニムスが第四世紀の終りごろ、ペトレームにおいてヘブライ語から訳したものである。「古ヒラテン語訳」は、聖ヒエロニムスより少くとも一世紀前にギリシャ語訳聖書から翻訳されたもので、「旧ラテン訳」とも呼ばれている。

「シリーズ語訳」とは「ペシッタ」または「ペシット」(通俗)の義)訳聖書のことだ、第一世紀ごろ

## 創世記

# 創世記

ヘブライ語から訳されたものであるが、後に七十人訳聖書の影響をうけている。

最後に、「アラム語訳」とは種々の「タルグム」(翻訳)のことで、ユダヤ人の日常生活からヘブライ語が影をひそめ、アラム語が俗語となってから、そのアラム語で説明されたものである。その根柢となつてゐる口伝は、第三世紀ごろ書きしるされたものよりもはるかに古い。

原文批判

略号表

例言



## 原 文 批 判

- ケレ・ケチブの箇所について、本訳がケレに基づいた場合は、批判的注を付さない。ケチブによる「ヤーウェ」という読み方は、ケレでは「アドナイ」または「エロヒム」となっているが、本訳は常にケチブにしたがつた。この場合も批判的注を付さない。

性や数あるいは動詞の形などについて修正し、それが訳文の上にあらわれない場合には、批判的注を付さない。またマソラ本において文法上誤っているように見えるものも、それが別の意味を示さないかぎり、修正しなかった。

批判の対象となる語句を見いだしやすくするために、批判の対象とならない語句をカッコにつつんだ。
- 1 6-7 【そのとおりになつた】 ④による。<sup>9 11 15 24 30</sup> 節参照。○ではこの一句を<sup>7</sup>節の後部に置き譲つて  
いる。
- 1 11 【(地は草木)で……草と……木とで青くなれ】 ○<sup>亨</sup> ○<sup>ナ</sup> ○<sup>訳</sup>による。12 節も参照。○では「地は  
草木と……草と……木とで青くなれ」。
- 1 26 【野の(すべての)獸】 ○による。直訳では「地の(すべての)獸」。○では単に「(全)地」。  
【与える】 9<sup>3</sup>に同じ。④参照。○にはない。
- 2 20 【人(ヒト)】 このヘブライ語「アダム」は「人」という普通名詞として一貫して使われているが、
- 4<sup>25</sup>ではじめて固有名詞として扱われている。○は本節と3<sup>17 21</sup>で固有名詞として読んでいる。

原 文 批 判

原文批半

原 文 批 判

## 原 文 批 判

(○)の19節には「かれらの」ではなく、20節のはじまりは「アシェルから」。  
**【牛の子】** 【(子)牛】二つとも直訳では「雌牛の子」。注17参照。この語の子音は古ヒュガリト  
 語に符合する。○では「果樹の子」。

**【わたしの若者の子ら】** ○サによる。④参照。○では「娘たち」「枝?」はあゆむ「单数形」。

**【若い牛】** 母音符号を変えて直訳すれば、「雄牛」「親」の乳離れしない子。○では「へいの上  
 に」。本節全体については注17参照。

**【射かけて】** 母音符号を変え、独立不定詞として「ラボ」と読んだ（動詞は21<sup>20</sup>の場合と同じ）。  
 形は18<sub>18</sub>の動詞「ヘヤ」と同じ。○は文法上不統一。

**【かれらの弓は……くじかれる】** ④による。○参照。○では「かれの弓」「もつ手」はあるがすも  
 ちこたえ、その手と腕はすばやい。注18参照。

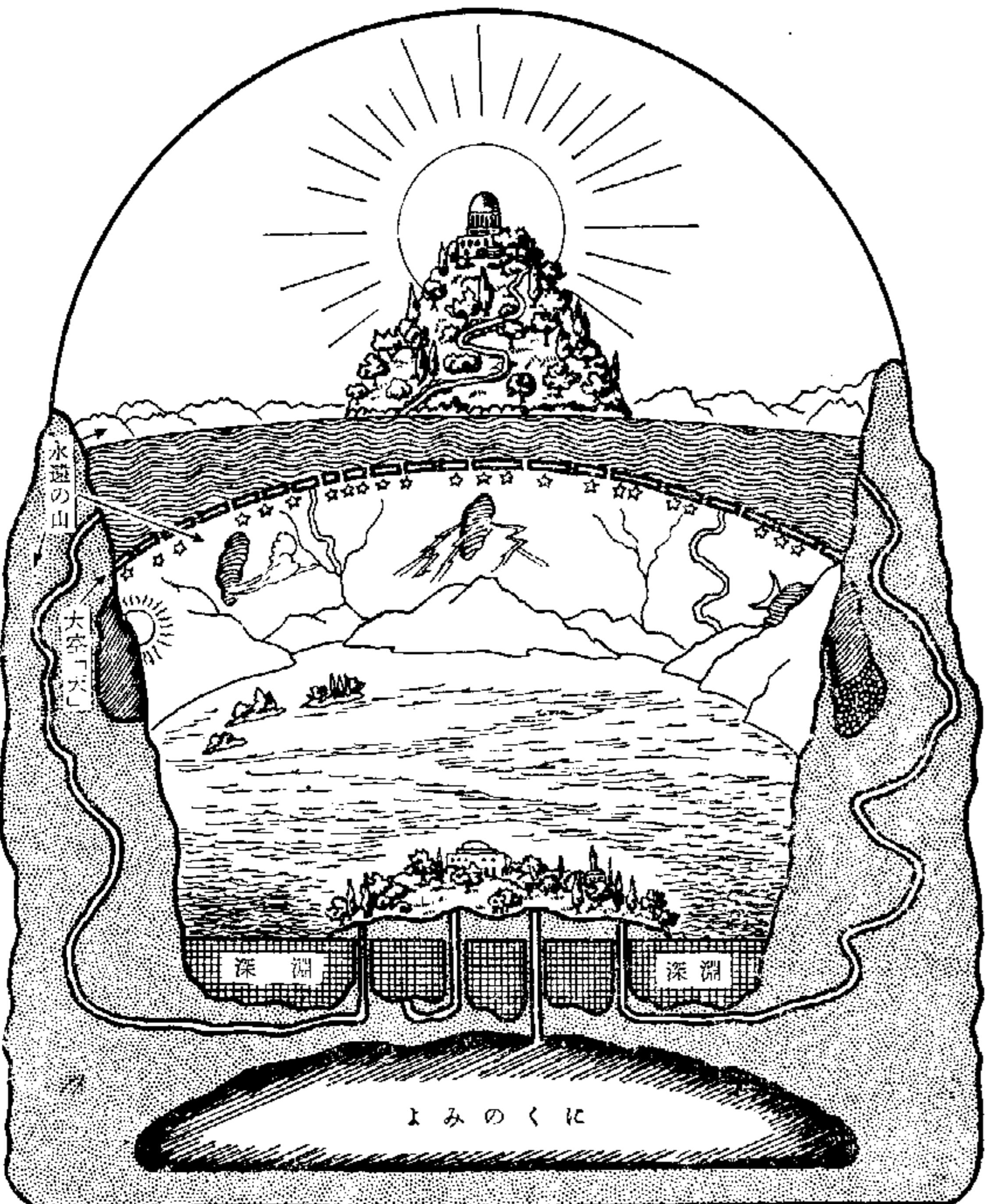
**【名によって】** ○④オによる。○では「そこから」。注18参照。

**【永遠の山の】** ④による。申33<sub>15</sub>参照。○では「に、わたしの先祖の」(?)。注20参照。

**【身内】** 49<sub>33</sub> 25<sub>8</sub> 35<sub>17</sub> 29 の場合に同じ。母音符号を一つ変えて読んだ。○では「足」。

**【恐れて】** ○による。○参照。○にはない。

第一図 宇宙についての聖書的概念



(解説は次ページ以下)

## 宇宙についての聖書的概念

### 宇宙についての聖書的概念

聖書にしるわれてしる宇宙は、当時の人々が一般にじだいていた考えにしたがつたもので、二つの階層から成る。聖パウロはキリストを宇宙の王としてあがめるにあたり、「イエズスのみ名に效しては、天にあるもの、地にあるもの、地の下にあるものせ、ことじとく、ひきをかがめなければならぬ」(ティリヤピ2:10)と述べてしる。二つの階層は本句の中にも暗示されてしる。

この二つの階層から成る宇宙は、二階建ての建築物にたとえることができる。すなわち二階は天国であり、神と天使たちの住まい、一階は地であり、生きた人間の住まい、地下一階はよみのくにであり、死者の住まいである。

地(創1:9-11)は、深淵(出20:4、サムエル下22:16)の上にあり、「水の上にひるげられ」(詩136[135]:6-24[23])<sup>a</sup>、堅固な柱にねらえられてしる(ヨナ9:6-38:6、詩75[74]:4、サムエル上2:8)。深淵は藏に閉じ込められてしる(詩33[32]:7、なおヨナ38:8参照)。

穴(イザヤ14:15、ヘゼキエル22:20-31:14-17-32:18-30、詩30[29]:8-8[87]:4-5、格1:12)をねりて行くと、死者の国である地下の「よみのくに」(創37:35-42:38-44:29-31、申32:22、イザヤ14:9-11)に至る。地をとりまじてしる海のかなたの水平線上には、「民族の浦々」(創10:5、イザヤ40:15-41:5-42:10)があり、これらは當時知られてしる最も遠い国々である。

海のはて(詩139[138]:8-9)には、永遠の山(創49:26申33:15、なお格8:24-29、ヨブ15:7参照)があり、天の柱(ヨブ26:11)ならびに宇宙全体の外壁および土台の役目をしてしる。

一階の天井であり、同時に二階の床にあたるのが、大空(創1:6-8)である。これは打ちのぼされた金属(ヨブ37:18、詩19[18]:2「神のみ手のねむ」)のような大きな板(イザヤ34:4、詩104[103]:2)で、水晶のよ

うに透き通ってしる(出24:10、ヘゼキエル1:22)。

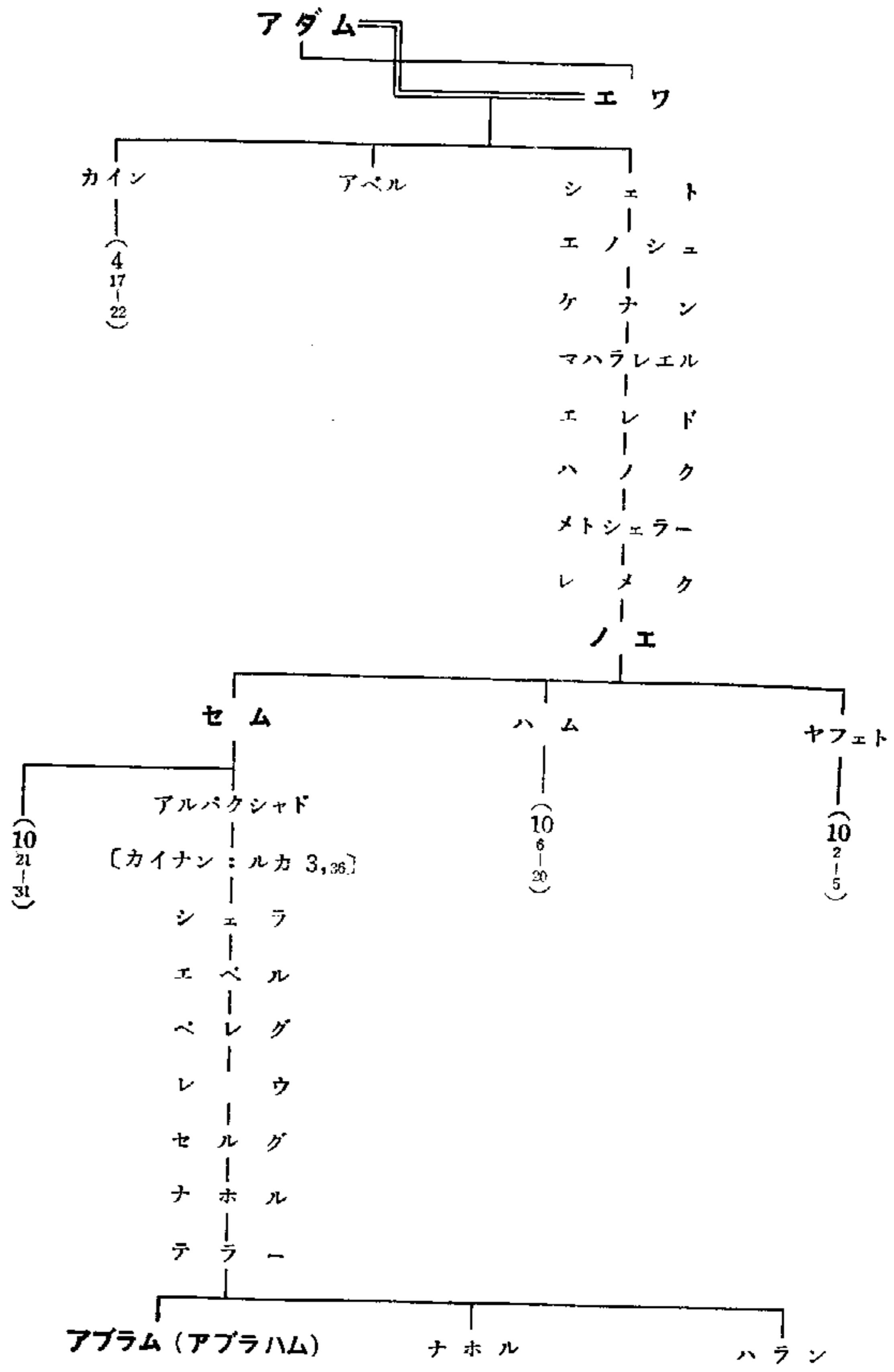
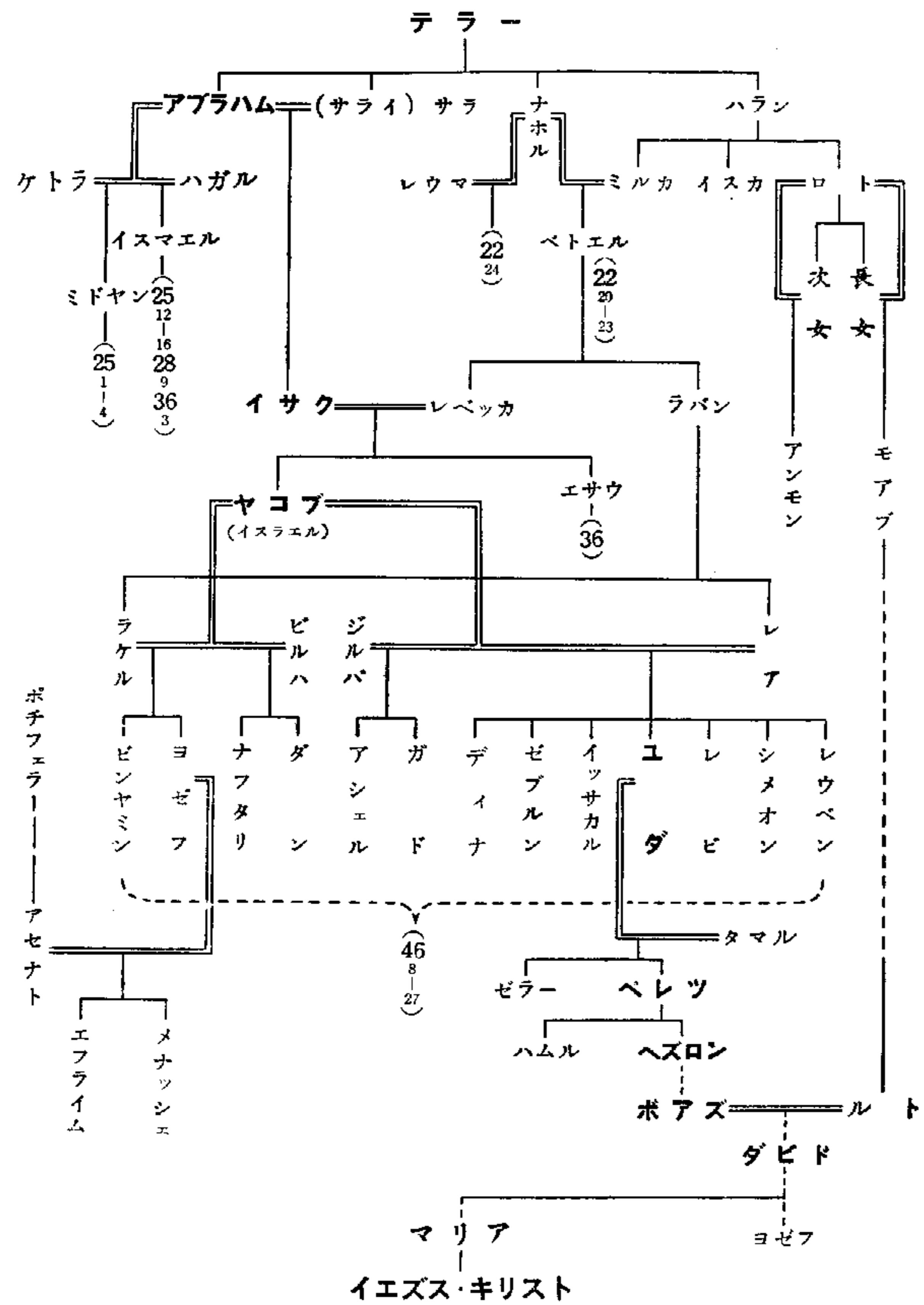
太陽、月、星は一定の軌道をとつて、大空の内側面を横断し(創1:14-18)、鳥は大空の下を飛ぶ(創1:21)。太陽は夜の間、月と星は昼の間、それぞれ永遠の山に据られたすみかにとどまぬ(ベバクク3:11、詩19[18]:5-7、なおヨブ9:7参照)。同じように、永遠の山には雪とひょうの蔵がある(ヨナ38:22)。

水晶のように透き通った大空の上には、天国の海があり、そのために下から見ると、大空は水色に見える。大空にある水門が開くと、雨が降る(創7:11-8:2)。地をとりまく海のからい水とは異なり、天国の海の水はそこから降る雨水と同じように甘く、土地を肥やす力をもつ。神のすまじから山をうねつて流れてくる水や泉も同じである(詩104[103]:10-12)。

天国の海の上には、神のすみかである山が北にそびえてしる(詩48[47]:2-3-33[32]:14-10[13]:8、イザヤ14:13-14-63:15、ヨブ26:7)。諸天の天(詩148:4、申10:14、列上8:2)は、すぐじの上に及び、その丸天井は地の上、すなわち永遠の山の頂を土台としてしる(アモス9:6)。

エゼキエルは、神のすまじである山の上に、理想郷エテランの園、すなわち神の園をすえてしる(ヘゼキエル28:13-15)。最後に聖ヨハネは默示録の中で、天の新しくエルサレムをここに描いてしる。地上のエルサレムの輝きは、天のエルサレムのかすかな影にすぎない(黙21章)。天のエルサレムの中央にある玉座には、アルファとオメガ、はじめと終りであるキリストがあられ、生命の水の源からかわく者に水を与えられる(黙21:6)。この水は、神と小羊の玉座から流れるまことの川となる(黙21:1)。この町は太陽と月を必要としない。神の栄光がこの町を照らす」、小羊はともしびだからである(黙21:23)。(Cf. Lemaire-Baldi, *Atlante Storico della Bibbia*, pp. 31-32.)

### 宇宙についての聖書的概念



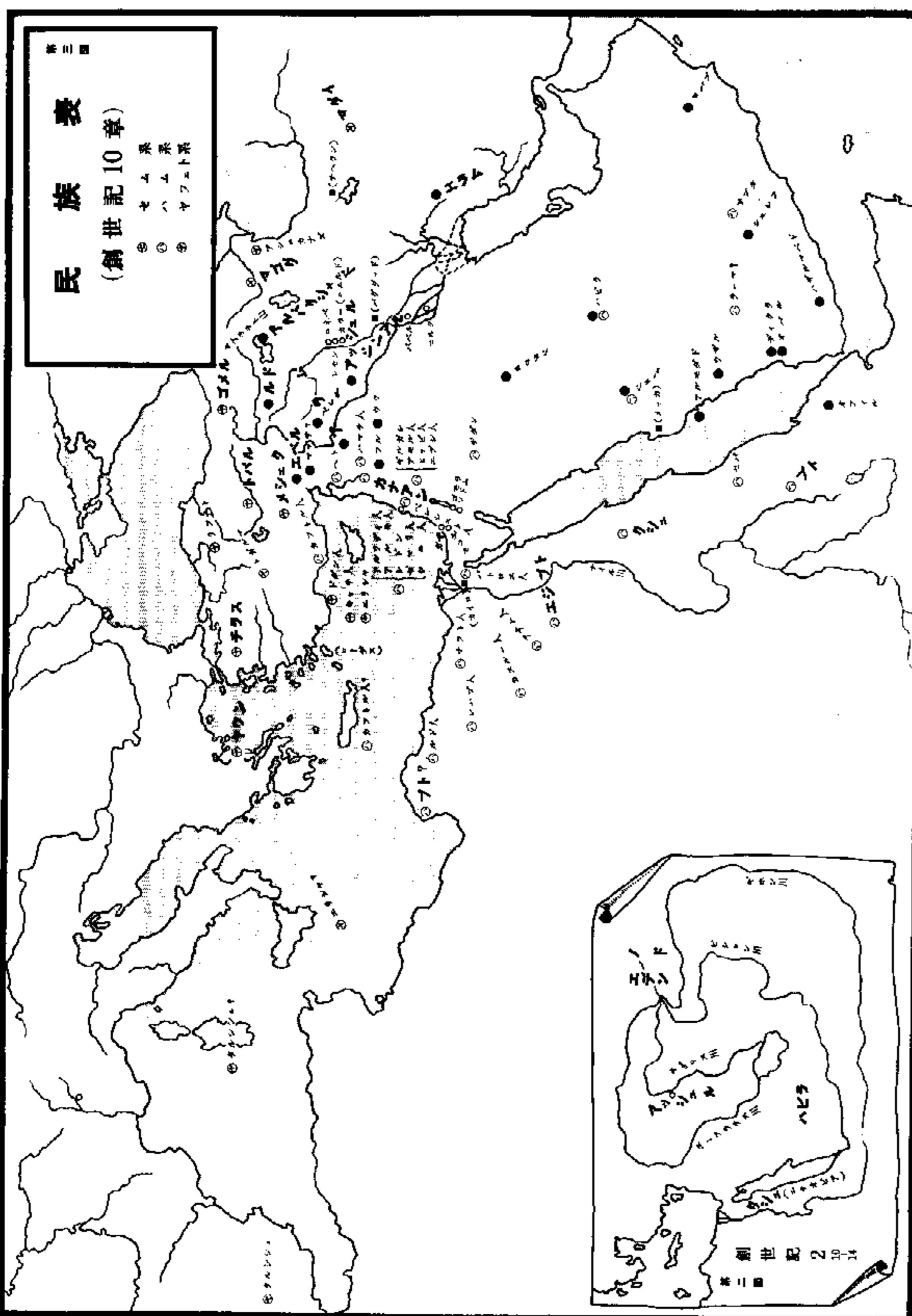
## とびらのマーク

太陽の中にえがかれたXとPは「キリスト」というギリシャ語のはじめの一文字である。Aは「アルファ」、Ωは「オメガ」で、それぞれギリシャ文字のはじめと終りである。神の永遠のみことばであるキリストは、すべてのものの、特に神感による神のことば、すなわち聖書の「アルファとオメガ、はじめと終り」(黙<sup>21-6 22-13</sup>)である。「正義の太陽」(マラキ<sup>4-2</sup>、エレミヤ<sup>23-参考</sup>)であるキリストは、新約聖書では、「やみと死のかげにすわる人々を照らし、わたしたちを平和の道にみちびくために上からのぞむ朝日」(ルカ<sup>1-78-79</sup>、なおイザヤ<sup>9-2</sup>、マテオ<sup>4-16</sup>、エフ<sup>1-5-14</sup>、ペトロ<sup>1-1-書1-13</sup>、黙<sup>21-23-24参考</sup>)としてあらわれている。このマークの中では、日本の象徴であるふじ山の上で、「世の光」として輝いてくる(ヨハネ<sup>8-12参考</sup>)。

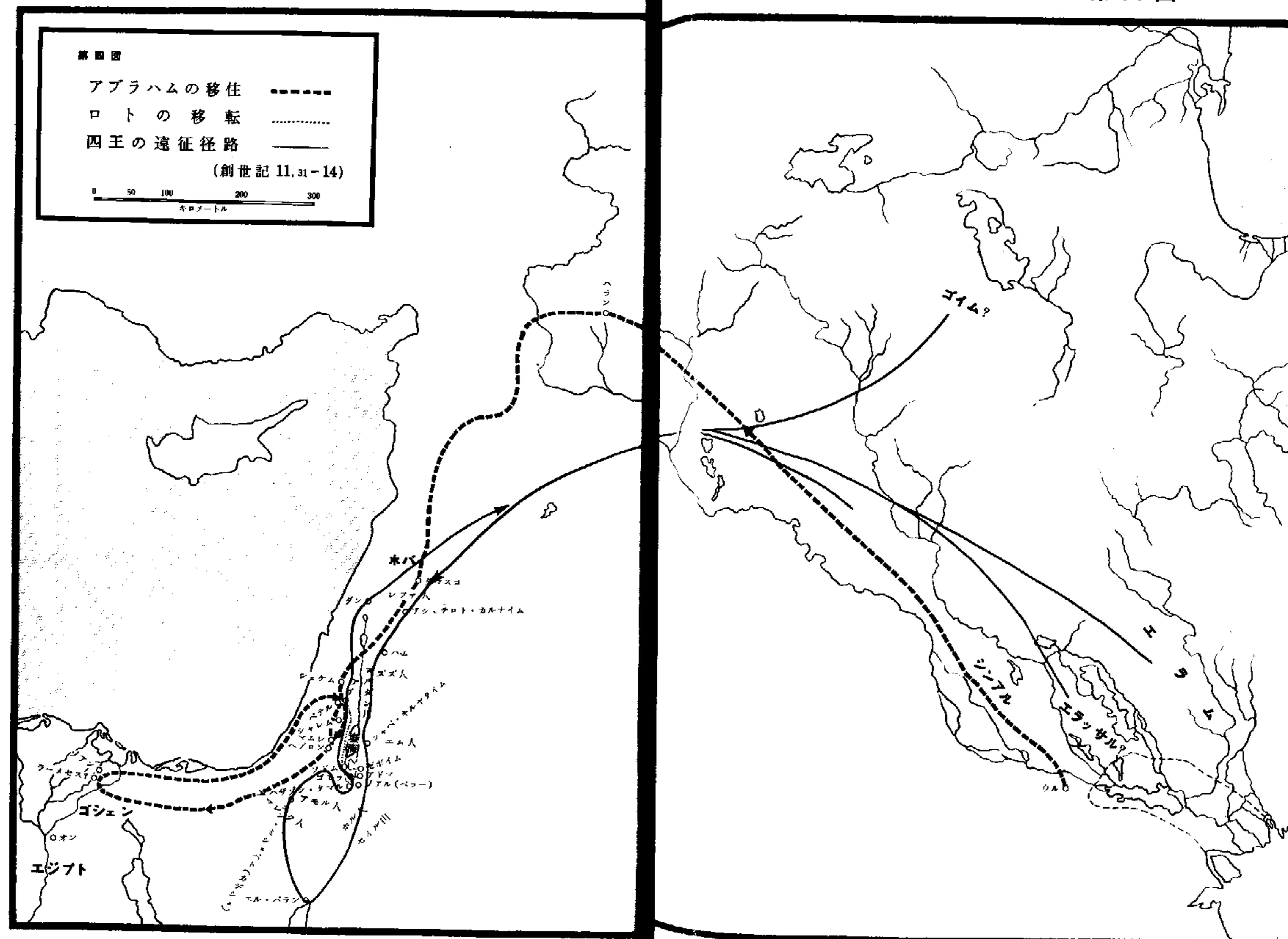
下部の巻物は、最近死海の近くで発見された写本になぞらえて描いたもので、聖書の基である旧約聖書をあらわす。巻物にしらされているヘブライ文字は旧約時代のもので、死海写本にしらされてくる筆記体と同じ形である。その意味は、「律法書」「預言書」「その他の書」である(シラ書の序と本書3-1-ページ参考)。

だいたいにおいて、旧約聖書はヘブライ語でしらされ、新約聖書はギリシャ語でしらされてくる。したがってマークの中のヘブライ文字とギリシャ文字は、本書が原文からの訳であることを意味する。山の上に輝く太陽がすべての人々に見られ、すべての人々を照らすように、神のことばも、日出する國のすべての人々に理解され、またすべての人々に光を与えるものである。したがって、マークは、本書が口語訳であることもあらわしている。

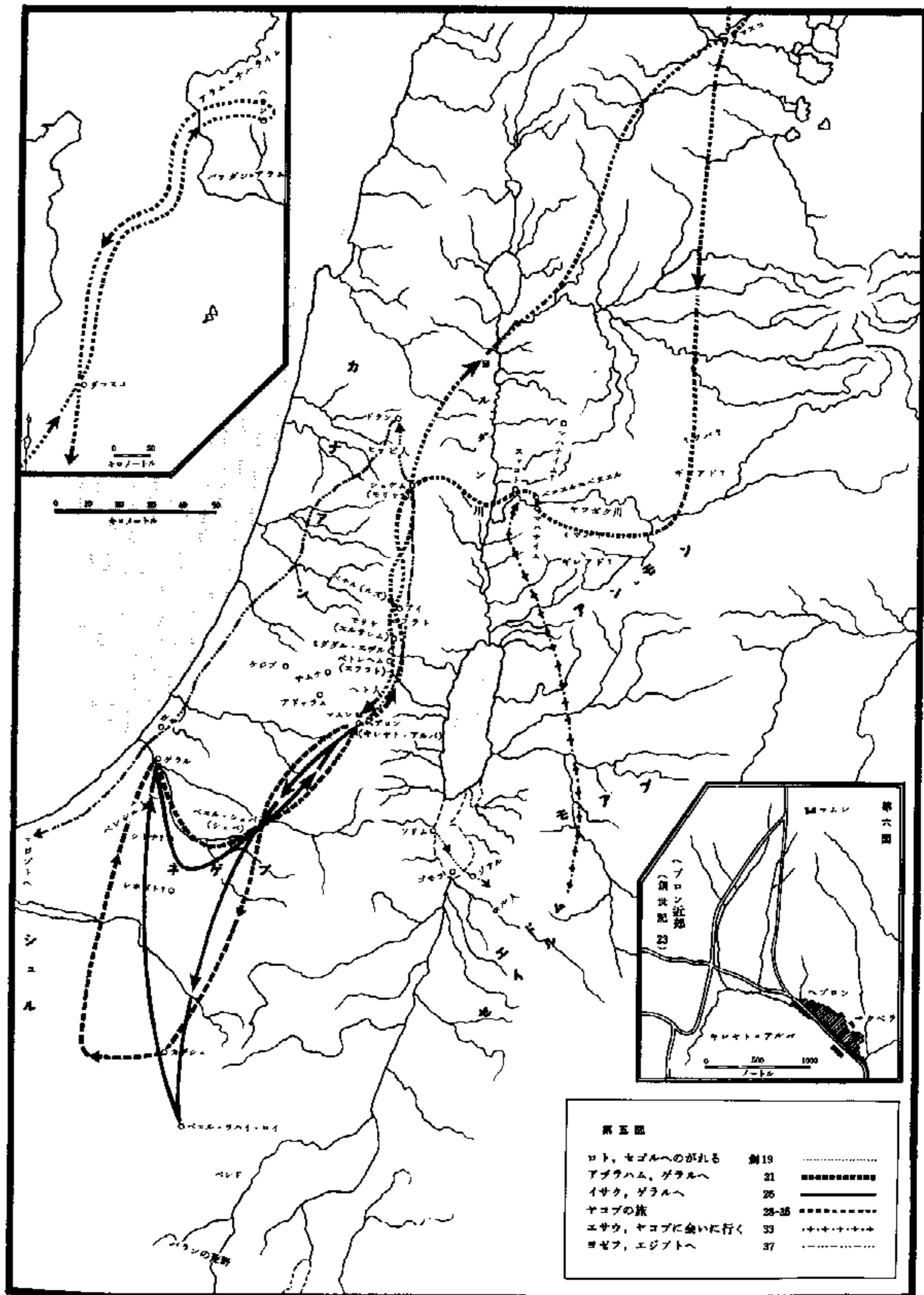
第二・三図



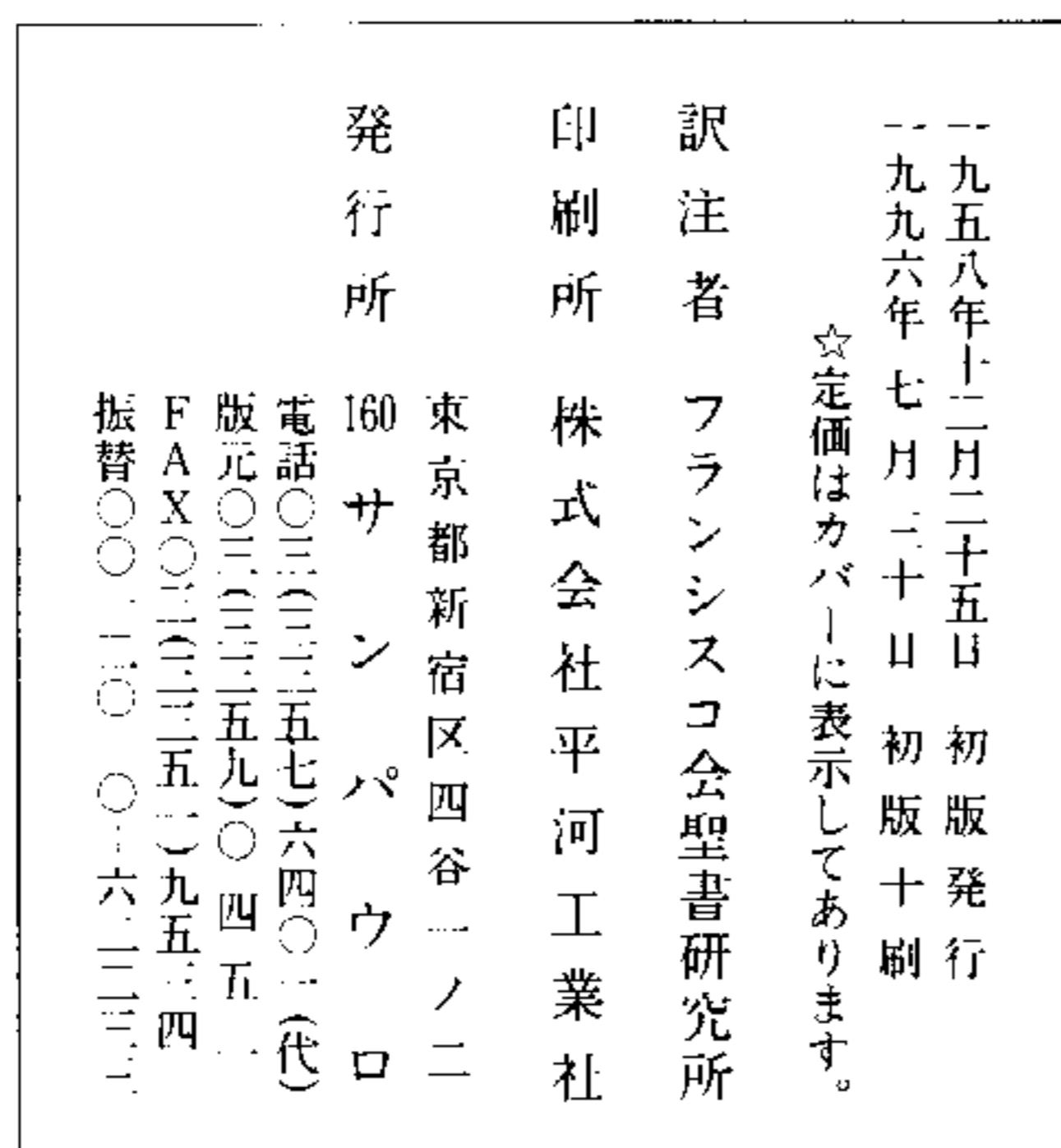
第四図



第五・六圖



Imprimi potest. Romae, die 23 Iulii 1958  
 Fr. Aug. Sępinski, Min. Gen. O. F. M.  
 Imprimatur. Tokyo, die 2 Septembris 1958  
 + Petrus Tatsuo Doi  
 Archiepiscopus Tokiensis



版 権 所 有

Studium Biblicum Franciscanum  
 4-16-1, Seta  
 Setagaya-ku, Tokyo  
 158 Japan

Printed in Japan  
 ISBN4-8056-5402-3 C3016

Publisher

SAN PAOLO  
 1-2, Yotsuya  
 Shinjuku-ku, Tokyo  
 160 Japan

## 既刊 (上・並製)

創世記

出エジプト記

レバビ記

申命記

民數記

士師記、ルツ記

サムエル記上・下

列王記上・下

エズラ記、ネヘミヤ記

トビト書、ユディト書、エステル書

マカバイ記上・下

ヨブ記

詩編

格言の書

コヘレト (伝道の書)、雅歌

知恵の書

シラ書 (集会の書)

エゼキエル書

ダニエル書

ホセア書  
ヨエル書、アモス書、オバデヤ書、  
ヨナ書、ミカ書、ナホム書、ハ

バクク書

ゼファニヤ書、ハガイ書、ゼカリヤ書、マラキ書、哀歌、バルク

書、エレミヤの手紙

## ヨハネの默示録

新約聖書 (合本)

B6判上製 (赤・黒)

A6判上製 (黒)

A5判上製 (赤・黒・青)

## 準備中の残りの聖書

歴代史上・下

イザヤ書

エレミヤ書

マタイによる福音書  
マルコによる福音書 (改訂版)  
ルカによる福音書

ヨハネによる福音書 (改訂新版)

使徒行録

パウロ書簡 I (ローマ、ガラテヤ)

パウロ書簡 II (一・二コリント)

パウロ書簡 III (エフェソ、フィリピ、コロ

サイ、一・二テサロニケ、フィレモン)

パウロ書簡 IV (一・二テモテ、テトス)、

ヘブライ人への手紙

全キリスト者への手紙 (ヤコブ、一・

二ペトロ、一・二・三ヨハネ、ヨダ)